



MY  
DEAR

## Pray

---

おはよう。  
ただいま。  
おかえり。  
はじめまして。

こんな簡単な挨拶の中で、いったい私は、私の人生で、どれだけの人達と関わることが出来るのかな。

何の努力も無く、手に入れられるものは、ない。

それは、きっと間違っている。

だって、所詮人は、人の手によって作るものでしか、簡単には得られない。

一つのもの背景に、いくつもの人の手がある。それは多分、途方もない数の人だ。

答を出せず、苦しんでいる人を私は立派だと思う。

諦めることを知らない人たちを、心から応援したい。

けれど、ふと足元を見た時に、間違った方向に進んでいないように、誰か確認させてくれる人がいれば良いと思う。

悩み苦しみ、共有出来る人がいることを、どうか諦めないでほしいと、思う。

My dear person.

あなたの未来という夜空には、いくつもの星が輝いている。

私は、そう信じたい。

だから私は、まだ見えぬ星を抱きしめるように、大空に手を伸ばし続けたい。

——いつも、可能性を抱きしめる人でいたい。

僕は、人間は無いものなだりだ、なんてマイナス思考なことは言いたくない。

貪欲は身を滅ぼすということにも反論はしない。

けれど、何かを一直線に求めることは、とても良いことなんじゃないのかなって思うんだ。

君が教えてくれたね。

全てを、良いベクトルに変えていけるのは、人間の心と想い一つなんだよ。

決心は人を強くする。それには、悪いことを真正面から、受け止めなくちゃいけない。

歌だって、音楽だって、言葉だってそうなんだ。良い方向に転換していこうよ。

自然でいて、何が悪いんだろう。自分を好きでいれる人って、僕は嫌いじゃないよ。

僕は、本当に大嫌いになれる人間なんて、多分、一人だっていやしないと思うんだ。

誰だって、すごく寂しくて、そして心優しい人なんだ。

どこかで、きっと回り道をしてしまっているだけなんだ。

僕自身、嫌な経験だってした。

でも、それは他人と比較できないし、比較しようもないことだ。

何故って？ 他人を羨むのは、遠回しな自己卑下と繋がっているからだ。

モーセだって言っているよ。余所の芝生を羨むな。ああ、実はこれは受け売りだけだね。

責任という言葉、名義上で使っている人間は、何かを見落としてはいないだろうか。

優しさを纏ってばかりの人間は、すごく不安定にはなっていないだろうか。

どんな人間になりたいか、一人ひとりが考える事って、本当に大切なんじゃないかなって、最近  
は思う。

人が、自由を感じられることを愛するのは、そこに可能性が全ての広がっているからだ。

僕はそれを、「YES！」と大声で言って、受け入れられる人になりたい。

もしかしたら、僕より経験のある人は、そういうことを当然だって思っているかもね。

僕も、まだまだ幼いんだろうな。でも、間違っていると、少なくとも僕は思っていない。

人生は無常だから、僕が「YES」と思っていることも、いずれ「NO」に変わっていくかも。

でもその時は、ちゃんと真っ直ぐとした、両目を持てる大人になりたいな。

だから僕は、常に僕に問題を提示する。

その問題の答は簡単かもしれないし、もしかしたら一生見つけられないのかもしれない。

それを如何に、様々な方向性を変えて見つめられるかなんだ。

僕はきっと、自分の頭の中に、さまざまな答案を抱えたまま、生きて行く。

その入口と出口は、いつでも外の世界の何かと繋がっている。

今のところ、僕の今までの人生の解。

I love all of the possibility of the world.

それに気付いてくれる人が、もっと、もっと。世界を満たすぐらいに、いてほしい。

## One scene of telephone.

---

——もし君が人に愛されようと思うなら、まず君が人を愛さなければならない。

セネカより)

TRRRRRRRR.TRRRRRRRRR.

「はい、ジョンです。

やあ、メアリー。どうしたんだい？

ええ？ ウィルにフラられた？

Goddamn! だから言ったじゃないか。君と彼は合わないかもしれないよって。

ああ、メアリ、泣かないで。

大丈夫。君の魅力は、クラスみんな全員が知っているさ。

ところで、どうして僕に電話をくれたんだい。

——え？ 僕が、ウィルの親友だから？ それだけかい？

——そうか、メアリ。君は、本当にウィルが好きなんだな。

恋人の居ない僕には、ほんのちょっぴり君が羨ましいよ。

いいや、生憎、僕はガールフレンドはいないよ。

少し前にフラれちゃったんだ。君と同じだね、メアリ。

——へえ。君には、そんなに仲良く見えたんだね。

じゃあ、もしかしたら、これからも彼女とは、良い友達でいられるんだろうな。

——うん？ どうして乗り切ったかって？

そうだな。言葉で説明するのは、難しいよ。でも多分、僕も最初はそれなりにショックだった。

色んな方法も試したけど、頭のどこかで考えちゃってるものなんだ。

メアリ。君は今、とても苦い気持ちでいっぱいかもしれないけれど、それは君だけじゃないよ。

誰でも一度は、みんなが経験している。少なくとも、僕はそうだったよ。

本を読んだり、映画を見たり、音楽を聞いたり。

何でも良いんだ。

メアリがこうして僕に話せるのなら、僕と君の時間が許せる限り、たくさん話そう。

——もちろん！ 僕は歓迎だよ。

将来の君が、今の君をまっすぐ受け止められるようになるまで、君さえ良ければ、僕は最後まで

付き合うよ。

さあ、話してごらん。

———そうだね。僕もウィルは好きだよ。ああ、これはゲイだって意味じゃないからね。

彼は、素直だし、お調子者だし。それに誰よりも気さくだ。

そんなところを、君も好きになったんだね。

それに彼は、誰に対しても優しい。だから、彼は人よりも少しだけ余計に背負っちゃうものがあるんだ。

これは彼の良いところだけど、悪いところでもあるだろうな。

———メアリ。下向きになっちゃうことが、今の君が一番危ないことだ。そんなことしても、埒が明かない。

適度な反省は必要だけど、それはまず脇に置いておいて、まずは、ウィルと過ごした生活と思い出を、きちんと整理して、受け止めるようにならなくちゃ。

深呼吸してみて、メアリ。リラックスしよう。

ああ、急かしているんじゃないよ。これは、文字通りのアドバイスでしかない。

だけど、忘れないで。

I stand by you.

嘘じゃないよ。疑わないで、信じてほしいな。

君には、笑顔が一番似合ってるよ。

うわあ。これじゃあ、まるで口説いてるみたいだね。

———うん。そうだよ、メアリ。君の思っていた通り、僕は、ウィルに比べると、随分とシャイだ。

学校で、こんなこと、恥ずかし過ぎて言えるわけじゃないか！

笑わないでくれよ。こんな僕は変かい？

さあさあ、メアリ。元気を出して。

君の笑顔に、勇気づけられている人は、クラスに沢山いるんだ。ウィルも得意げに言ってたよ。

———いいや、とんでもない！

こちらこそ、どうもありがとう。じゃあ、また明日、学校で会おう。

Good-night...mary.」

